

「学生ジョブコーチ」による障がい者就労支援の役割

The Role of “Student Job Coach” in Job Support Systems for the Person with Disability

○望月 昭・中鹿直樹・尾西洋平・林 炫廷・乾 明紀

MOCHIZUKI Akira, NAKASHIKA Naoki, LIM Hyunjung, ONISHI Yohei, INUI Akinori

立命館大学

Ritsumeikan University

Key words: Job Support, Student Job Coach, the Person with Disability

我々は、援助・援護・教授という3つの機能連環を軸とした「対人援助」作業（望月，2007）の実践と教育の場として「学生ジョブコーチ（以下SJCと表記）」というシステムを展開してきた。そこでは、学生（院生および学部学生）が、障がいのある生徒や成人を対象者として、就労実習あるいは就労現場において、その個人にもっとも効果的な支援のありかたを実証的に検討し、支援実践を行ってきた（中鹿，2010）。

当発表では、2004年から今日に至るまでのSJCの実践の変遷を通じて、障がいのある個人の就労支援の方法として、どのような内容が必要か（あるいは可能か）について、概括する。そして、大学という地域セクターを、新たなディシプリンとしての対人援助学の発信する場として、また人的・物理的な「援助設定」資源として、どのように活用しうるかについて再確認する。

学生ジョブコーチ（SJC）の支援内容と推移

1) 記録と「教授」

SJCの発足当時の基本作業は、まずは対象者の作業遂行を克明に記録することであった。対象者の「作業効率」を可視化しその情報を事業所と共有することで、より高いレベルの作業へプロモートするという「援護」機能を持つ場合もあった（高津・望月，2006）。

また当事者の「行動形成」的な教授は、当該作業の課題分析と全課題提示法にもとづくもので、それは今日まで基本的に踏襲されている。また行動形態のリファインについてはモデルおよび自分の作業の映像を用いたビデオモデリングも使用された（川崎ら，2010）。

2) 「援助」設定の内容

①治具導入（物理的援助設定）：課題に含まれる行動項目の中で、正確な反応生起を成立させるために、レジのキーの印づけ（太田和宏，2005）、時間計算定規（杉島ら，2009）などの物理的支援ツールが創案された。

②セルフ・マネジメント促進のための援助設定：作業の完了や評価について自らが「自律的」にそれを行うための援助設定として、自己チェック表（太田隆ら，2006，2008）、作業記録表（飯田ら，2006）、メモリーノート（松田ら，2007）、作業チェック表（山口ら，2008）などの利用が検討されてきた。最近では、自分で加筆して自らの業務を調整するスケジュール表の作成と利用の可

能性、そしてその行動の評価方法も検討も行われている（尾西，2012 今大会）。

③職場における新たな「役割」の創出

「援助設定」としての新たな試みとして、中鹿ら（2012，今大会）は、職場実習の現場において、他者への指示などを必要以上に自発し、それを「問題行動」として周囲から指摘されている移行支援施設の利用者を対象として、一定時刻に摂水などの指示を出す「リーダー」の役割を週のうちの特定日に設定することで行動の分化をはかり本来の作業の効率も高めた。また小島（2012，今大会）は、当事者グループの中で、当事者どうしの相互支援や新人に「教える」という役割がどのように自らの業務遂行に影響を与えるかについて検討した。

3) 「援護」設定としてのキャリアシート

SJCは、個別の対象者において、どのような条件（＝援助設定）があれば行動が成立するか、またそこから想起される次なる仕事への展開の可能性はどのようなものか、当事者（保護者）と支援関係者で記述し情報共有・移行することを目的とした「キャリアシート」（通称「できますシート」）を作成する。これは個別の指導計画（IEP）とも連動しつつ、在学中から卒業後の就労後までを含めたシームレスなキャリア支援を効果的に行うことを目指している。この「できますシート」は一部の特別支援学校にも実装されるに至っている。

アクティブ・シミュレーションの場としての大学

現状での「できる」行動レパートリーを具体的環境設定との相互作用として分析的に記述し、また次なるステップの可能性を実証的に確認する上で、個別個人にとって必ずしも最適な「実習場所」があるとは限らない。そうした間隙を埋め、最適な支援手続きを分析するためには、個別の対象者の目標にあわせ構造化された「実験」（訓練ではなくシミュレーション）の場が望まれる。そのような目的から、大学において特定個人に合わせて完全にカスタマイズされた「模擬店舗」での実習が試みられている（川崎ら，2010；尾西ら，2012 今大会）。

文献

中鹿直樹（2010）対人援助学の実践と教育の場としての「学生ジョブコーチ」の可能性、「対人援助学の可能性」（福村出版、第1章、32-58）。